雲之部

新書籍

へ5
1928
5

5
1928
5

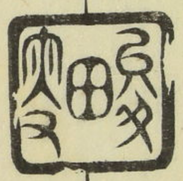
俳諧觸六編

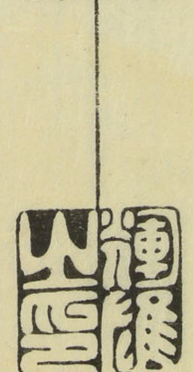
叙

菊亭家雅見種あり紫童子觸
は佩見に書既に六遍に初の婦
支ハ不易の体の流行あれハなるを
志ゝ可るとき八判者數輩の腸を
觸して速に支まるしを見る支
此両部をとて見し知るのちゝ婦

なる鶯へ〜と編る無年のうち
白くちとるの〜 鶯頭を撫まるの
あ〜ま〜ちと著〜〜〜四方を梅花〜
待るの〜

辛丑燥





黄花菴

陸奥の方〜
新よし
鶴の巣 甫の秋
〜〜水仙とりの字
ちと入〜白中
〜〜〜と付〜
〜〜
京都西 江戸地図
寛文 古事
吉野 人名
〜〜〜白〜と
〜〜〜〜〜〜

深川湖十

月〜る立風〜筋の細工屋
西方 海の茅所〜る西大寺
巳の方の玉川 八幡〜茅〜
俳諧の事 角〜七小町
風〜付 云〜〜曲の山東武
島のかめ 新〜〜き 作和
〜〜ふの 茅〜〜〜ぬ十国〜
六月西 〜の〜〜〜〜夏 夜
〜〜 一抱 陽炎 〜〜〜月堂
〜〜〜 山の外 〜〜〜〜〜二の筋
伝吉の 〜〜〜〜〜〜〜〜〜
秋の 〜〜〜〜〜〜〜〜〜

秋色亭

田野菊

[illegible]

六藏菴

深川寶井

禅る

夏色
笠ぬぎける
とまる露る
次の名れ露の
雨もまゝ

討死の仰にはよろしとるの画
禅ハ今に嬉しかれ抄る人
独活擬りまれ南翔の来士
おもひのかまゝ安からく頭ゝ埒
金屋餅名根のてかゝ餅こそ
浮世のくし土農工商
麺棒も疱瘡に知く木馬の秋
に京都一句の橋大工
うらと哀られぬ茂林寺の所化
赤穂の母も同し男気
口数の多いは女の通夜明けて
瓶子ゆゝ申るまゝの本陣
入相の風坊湯も花の山
桜の蒂へ黄な貴人とと
夕暮の床へハ寄とえるとう
雷もつゝと稼ぎ

雷吼庵

強弱あらて
意の句よし
買気ありま
一体句中に
おもしろと入て
作るへし
新枕とふ句
まとなしる点
とねしるあり
是の句今も
よろしま

角田為裘

鵯の群へと見えしと鉄漿水
茶の湯へ嫁の兄ある飯粒
聟源てよりしくると来さつめ
明る日ハ無沙汰の痛き新枕
出家望国に枚も葉もなし
菜雛寄る伽油のきぬくし
盗りと逢ふしての抜ける路次
白無垢すると死の最期に
くまゆりと無く紅閨と出る
妾の屁とも花もち温石
寺と云ふくま苦所の峯
わく迄て武る結びの帆柱
嫁る日より乞食の鍋と替る
死切さるとも出て寄の見る念仏

[illegible]

揚屋の厠[illegible]
人[illegible]
灯菴の火[illegible]
新宅の魂入る一万[illegible]
財布[illegible]紙[illegible]費
[illegible]みち法加の墨を過也
[illegible]の果[illegible]者
大門[illegible]日月遠き所[illegible]
男めかけの虚[illegible]
朝飯八新枕[illegible]
[illegible]
辛[illegible]
太吼[illegible]田楽[illegible]
中菴の[illegible]
[illegible]
不[illegible]の[illegible]の[illegible]油燈

白雪菴

[illegible]
甲乙[illegible]
[illegible]中海[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

淀川石腸

[illegible]者を[illegible]の[illegible]
[illegible]千幸[illegible]
陶[illegible]
備[illegible]
町[illegible]
[illegible]
地震の[illegible]の如[illegible]
[illegible]
脇の[illegible]
[illegible]
[illegible]八女房の[illegible]
[illegible]
女房八[illegible]

瞻窗

山本吉雲

松窓

一仲春の頃の方なり
松島の名所を
指南せるのし
道をハそまれる
かハしれ色ハ
花をうるかき
を只うけ色を
或ハかくしる
白よし
水辺　水仲
賞多かくして

崔海堤亭

ありけるの日新へ御と金魚の家
二ツ家あつて又ツ寺ありみち
門者を嘗く戻る夕ぜの門
田の名の宗の日　郭八田の浦
毒る屋根又一ツ陽亀の三目境
樹よ所せく八日の茶研城
大赤の田炉書所く書葉く
恢柱よ夕陽城とる所舟
葉ハ元のまて有田の竜田姫
亜目境とる石と石の堂
掬横
掬の南の松坂屋
掬の宿成の日とく掬亀
氏中亜書掬亀とのむの

為太師　文嵩師
絵目　戸山
竜田姫　夕陽
朝虹　夕虹
ゑすましし
忍しのふ
芳卉妹石動
芽坪町芳洲
小石川　大石
上池　濵中
同名
ますみえのゝ秋江
静のまるかうと
あふひの会かくし
外八編の種節
を編よし

東西の戸山の荒井ありあんて岩に焼く時も梅ハやうに似て角のある物とハえぬ紫の花兄弟に置る君妻の紫宸殿高かるまける芳哉て菖蒲左右にえて居る桜の杜の辻子の咲ひするや季候の松枝河岸焼て盛譜知す屋より八名のるい桜木手をとまぬ所に植ておる花吉原近く絵るも我中よ新日若うと周よえせる卯あたり浪みし漂ふ舟も岸ゑ名の京も星の深姫生姜より寄いち着の春の花夕焼をえて垢と淡む也涙

正月菴

所すゝうするえよし
京北名
買気
句とあまし　詠を
表よ八し
出題よし
秋の句
出雲
見え出すめゝき
よし

野木本来爾

先業をかくして某か置ゑしき舟作りて集りぬ矢檜より枝の為との家有りも中のよい蓮来りてハ笑み筑六の田植笠此母の外よ蚕の孫七郎中ちもほんなし中よつめるあり動くしもかくし戔ても嬉然れもいえて上下反えあり よく書れて秋と兄の気く紬売七里暮し寒翁も鋳桜とさハときハくも菖蒲太刀吟さう家関屋の新文性を帰りし終し詰め師子よりも母の座する乳母も

雀婦人

雀海園女

梅梅

薫風舎

弱き方なる
近年世を碧
て仕よき長く
植物　紅葉
花名　簫
齋藤　琵琶
琴　羯鼓
鉢扣　定念仏
関　自慶
尼　御
生長

高松美左古

裝束　仕きのそらい　俗人
白雨の降てきよろと今の庫
後へ去ろ　須弥の琴の音
御明　物音　星宮　弾き
屋　物　樊　紅葉　八流
一附　坂　のき雨　つ笑
森　雨　周防
慶　むく小屋　十月の塊
御　小屋　の家　茅地
屋敷　施茅　の内
茅　傾城　貴の
都　琴　琴

蛇ふくよし
佐人のうらさ
山表小辺のと
よし

相一葉ト山の見の笠を着て
堺一宝の狐のあやの毛織し
呵を通しく笑ふ関寺
ひちりき法師の機を通き南方寺
笙の音の蛇るさしん殘二百
あり生さハるを寄る利の関袋
今ハさくらを尼寺 什物
院のさくらを 蛇
寺楽の網へ法師の蛇ハむ
山公事ハ麻布の安を
毘毘弾ハ鳴きんと思られて
俊の行者の知る迄
毘毘もすく蛇屋より遠き武庫
茨の実の井るさしの田の
ふく 関の外く毘毘の化物

昨非菴

強弱あるへ
京の花の方
白と言葉
仕立て
思考
考行
母子
嫁新
佐尼
写文書より
汚きあり

溪山傘車

京安京母立一家ハ
桂男ハ深木の
笠高ハ
るハ田を
母もさ
紀へり
京を立
写ハ京
考行
生ひ京
民の角
秀を規矩
梓
嫁も梓

[illegible]

西月菴

[illegible]

笠家浄阿

[illegible]

つと入 二条院
四条の宮
大文字山
菖蒲
沖中の船頃
清曲
叶勢ちく
清とち年ま
考へを了

雨夜菴

陰弱考へて
世作りとあるも
道とあるも
一句を樹ノ根
あるを了
高地点
ロケ地の
ふくとの地名
根ね
きへて高雲地
のあとの白ケ
松ひくよく

峡田菊堂

来の秋是東ほうけハきりを
旭て〳〵庚清の松
夕京の咲くと田松の傾て
三井の秋十方の色ハ〳〵
石菖黄ゆく庚る住吉
とつうさハ紅の雲の和歌ひ
百年も到清さやゆ石今
曲徳ちと妻の別恨
拓書の目口へちる不松の実
竹葉の訪ゆ挑みとなられて
茅刈ノ葛とて清迷ま
庚ま〳〵と本丘町へ状
灯火の十とそろりぬ川社
八海の比良へ八方丘の日ゆ戈京

任他郎

柴田敬忠

しけるさ句
人名　芝居
遠近作らし
当世儒也の姿
風流なる句なし
心の松　むの徒
仏の猿　むの雅
むの水
あしてゝ仏の何
とあるなるよ
うるさきし

宇庵ぶさんく花柚折る庵
むさしのとこへも同し京の事
氷室通しゝ二夜床さる哭
月よ宮き若葉と浮元のお出家
私和しゝおりひ切る　京
まゐ年も掛ける桂船の刀掛
キうしよ背柳解うて京庚
いつゝも同し秋のかえ原つて
上下も一日伊勢の旅ちつも
桟敷割定まるうちの橋う法
矢部山桜戸よ入とも(く
丈夫笑と揃物知して京古座
屋敷かも子持仏へ後朔気も下
嫁御のちゝし落る涼屋
旅芝居奉る平家の蓋色了
嫁と名へ入せめく九重

昔々庵

強霧来るゝし
神祇、石数
恩恵　宮居
罪名　名所
山野　水辺
とくゝ師京
植物　異物
いうき所をう
よむとるとし
京かけ　かけ合せ
まるよし
色の作るをあ

關琴嶺

初日午白き不二も大都
暇ことさふ子うまてまれそう
格子朴て家ても雅の西
笠しう取る浪のあけぼの
青柳年旅の海も和歌の浦
琴の京かと白京の滝
花信よ両の桜ハまるよけひ
まる帆と孫の末ちゝ家所
里かし子かし千金の春
橋き袖のよ(ゝへ蔦
まるなうて琴柱の下の子よ家並
灯も常かと京流の中庵
夜くゝの後髪引くさゝハ垣
西嫁縁延垣の家と奉る了

雪仙斎

東梅堂

[illegible]

相應菴

[illegible]

杉浦秦川

[illegible]

[illegible]

季大菴

[illegible]

野木李千佐

[illegible]

おまえにきて 見えても

締りも所のつかまる中将ある
掩迫ハぬ土塀の倒のうるさくて
粘の柳梅々の間に散播して
爪々葉も清し將原の表
いつの是に叱条も家の番所
杵舟のかくまを記し舌辞川
器物の竿に琵琶の弥を掛かゝ
矢陣の奥に連歌をまたして
稲の架の氏の命ある嘯にある
寄てまをを清ふて露る葉橋
山茶花に春待を向て針北す
夜迫く宿の娘のねにかけて
きまふ好稼をよこさまの西
魚見れ千鳥なるるにしんのを
稲舟に乗りて来てみる寄の家
留寄と千鳥の[illegible]

雀々房

孫猶あるべし
神祇
名所
貫色
植物
伊勢
帆
徳政
思ひして一流長
のなめらまく
よし

及川長隠

鼓打と呼る 元日也く井戸
若迎き手松山千斧の音
陰も知らぬ除夜の安産
門松の御代とあやまき幟柱
雅々とむかり和泉の浦人
誕生祭めでたき珠数の音をかり
庭打と畑る州壱の傑の約
あつかしき出産おろして新治山
暦見て置くの気分の笠
そよぎし 長者宿を訪ねる
浦をと川まうすの校の桂川
今枝さ祖考の上の歯朶の本
実名を始うる吉原の神
子細の内灯に光る除夜の蹤

神祇ハ…
みあるへし
白…
よく…
みましくと仕
立つへし
…
よし

松根によつて居眠る礼の供
駕籠の出る…の笑ひこう
中屋…のちらつく松をて
…帳のきこくえ保の…
松印…陰形の傾城
松に灯のうつる薬家の一方交
角ハ…今とぬの伊勢語
…田の夏小角豆
御に…き…戸の元日
帳ハ白くと住吉と春
語も…のつゝぬ少…焼拂
狐火の中に王子の松飾
…ハ…る…の袖
旭の…の宮
旅人の帳子…る…山
[illegible]

三爪庵

…へし
…
…
…
人名…
世話…よし
毎　姑
年　嫁
女房　妻
妾
…
…とえと

内田柳尾

…の…
…水…
鉄炮をかくして…
…の…
…ハむを…毒の…川
…の…て…さくら
…てこちへ…白眼
…と…て…
…へ…の…年貢
…の…目…赤旗
毎…
…ハ…の…
…中へ入…母…
…京の…

玉田夫

弱弱者へ
見る弱き方
句仏い貞享
元禄の古人俳
見るよし
又奥羽地名
軍の
句仏ある
在特と白鼠の
用のものかり
そそといつる
なり

小栗易難

[illegible]
園のうちより接さんくと
和尚とてしめ接事なり
さる故と新せるハ接ぜ
一門より庵せき伊故後
捕人法ゐ平反をあ
故箕をよ故者の足跡目よ立て
出妻を落らめよ抱とあて
小黒法ゐるよ抱れて
経末干を雄命の苦屋られて
亀よ占ゐく俳ちされなり
蘇屠茶苑よ禁ゐあられなり
攻ロと古今俳接よかくなり
家女ゐ国ゐ命よ歓るし

長白てらめ
なか笑ともあると
らのむり
声風まして
もられると
みらふえから
当時の風とは
えんてある

蘇軸に布月尾の庵鋲足
嵐み浅に似するようちらむ
見しき住吉搭書きつひま
者み来る人をよ露の袖とあり
海棠の美人の寝中くうろあり
勝に梅見く鶴康も秋
偲をも中に路幸の唄
乞食の者を指る書帰
月の故きをもつ讃よきことと
尾花ゝ来にし 雷の宮
梅くの薪をめくる本宮の奥
黒犬の娘いさるかの山猫し
大道人の烏帽子 狩衣
さふおらく尾花かくれのいゝふ女
首狸をといゝする年の年始め
わざわちる中うさわらるゝの舟

珍斎

一体まくらら
これらハ世からハ
あり
隅氏お旅
信能君
尼 新友
母 あめん論
極物
世为懐く
からのあきしを
きあるけ江へ

酒井夜雀

まろみくを種とく屋根の中
紫の引摩菜しつる朝まくる
声溜る旅迄て萩の陰許しし
京の月江戸と吹るる去府黄
高る比て高る子ハ家る年
た迄の硯も濱戸まく春尾
おしへねといつう来の八文字
雲をうき嗜みて娘入の仙たもか
順の年 和歌ハ扇かくしうきと
佐倉の伊達ハ古今の樹の札
やよ国極の迄つる 積自天
多之く 遠しめ 額の嫁
舎者の文まく 座く底食
さ気の智まつまるようすれ本

雪　常
高所の雪
数年をへて
理屋とやなりけ
ゆのよ実も
よし

[illegible]

[illegible]

雲房

[illegible]

林　泰道

[illegible]

新花林

皐月平砂

歌の姿紀州千書
小さるきこゝろ探ふ世ゆり
出代とる芥子利くゝと情まれて
海むこ流れい格ちくゝセもの
仮名寝まれる寄り風流士
猪麻をつくゝ歌をもく人のあ
吸色くゝ歌と書と寄は行の歌
多元とおりの寄りか
鶏うる鶏のあるまむし指
麻るをくゝセある人の系結め
斤仮い氏る遠ひて知くぬ名
うるの人へかるくうひ
寄の仏世まおくゝも廊らしき
仏名とかれい苦よるくぬ痛

今川かりのあるじ
ねぶりのうちみ
の白いきのうち

清持佛ハ七ツ寺金閣寺
夢中の首感ずる伝ハ双絵
ニテ桶の清ゝ伊丹の壺清ゝ
人一人ずゝ人ずゝ多い同士
れと多ゝ口利をする悪ゝ
嫉を妬ゝ人の元ゝ入る
千ゝの作ゝ人をかゝふ
潮火ハ海の内ゝ
組ゝ獅子ゝ
鏡ゝ仏ゝ麻ゝ
京ノ
場ゝ
今ゝ
迫ゝ
利ゝ
雲ゝ

角醒

清盛ハ
極ゝ
母子
妹姉
仲居娘
叶ゝ
坊ゝ
ゝ
ゝ

作ゝ人抱てすれのかゝ
雷ゝ
掛ゝ
海ゝ
ゝ
足ゝ
ゝ
清ゝ
大ゝ
ゝ
ゝ
寺ゝ

安壽田秀億

徳山斎

榎本牛吞

[illegible]

米仲らの　まる
又も此の
先覚らす
　化もり
跡ゆゑと
なそへ

竹の枝くすれる　身庵
庵主ありて此草用ゐる道びて
圓をきさいて傘八千ある
後ふして妻ある人やる　店
神絵申くる医者と振出して
今月西と済て八幡子の後
伝くみ陽へ申うて　母の飢
は物見く近く　乞食　頌
帯させて泥水の中さの事と咲
百姓の手とあちます　驚帽子
う梅の次の化千　葉鶴
揚公の嵐花八十川する
人並子なき常の大千近き
黄みさらに章次ら私抜もちて
大まそて抑くらせし　庵坊
向くし　千代のくさ傘

萬葉菴

強うきぬちらを
中へくるのよ宗不
と言筋子すくし
何鳥あり　従国
尼　法師
菴　得多
僧　寿子
丁　六八
子　蟲る
梅　阿坊
○重　御繁
連字　凱陣
支鈍　秋夜
小笠

皐月東窩

肩替へる客に護持の盃ゆもて
阿の嫗の若きし新を屯て
枝女とく場をまた大人を捨諸して
此家の北と庄の哀絶して
千海若子妻の剃刀なかをて
泥舟の陽と旅僧を押中ゆて
八新庄京の読経を持越して
旅席あり懐の子を入て
岩に擇多りとかりふ家道
佐月半ハ田をめきうる纏簾
炮孫の桃まて比き桩かれ
多居きよろりと多熊の多枯
琵琶へおらんとわる舞羽翁
年ひし東の後多競馬

猿楽の句
瓢箪　地名
後指女の句
要るハおかしその
ある句よし
おらん
つらう
きようう
つい
ましらく社よし
一体ハ短ほどよう
てきまうあるめ
なり
近比ハ後集よる
似かよひたる句も
数多見ゆるあるま

名を実くせしてなるふ新造
格原の奥千丘の住む庵
のりむきなしく新造て産る
けむ8千部の施主八支雛し
丁度しけ連ぬ姉まれ
屋も好すらら迄て来る二筋流
糸臆古のるこ舞子召さるうし
古覚昼ヶ謙いよく町名る
学の美子掃掃く勢気高
様るしけ務勢もる寺
あいつる舞をえると紫の戸
中の町まるし毒の絵こ
八坂の仲居術を集む
君左ちるうしみの町声
不化家の陽子吹ちる不二夜潮
安孫左の馬帽子来みよくも

來笑菴

かしもつまあつ口
方よし
強きとそかまも
あ々も
おもしろき本と
しゝ句作ある
へし
也
暑ろ名
いつきも是ある
実情の句も
よし
此を考へて
句作ことなきく
あるしき

髙橋杵貝

馬の毛も見かる母のむつしき
新造と出て焚くよる寐すへ皇
妓吏ま根りふし市の草ある新
出居の次第し将春み蘭
素あるもか名て鞠場の様深なる
りかい法華か了書ハるし男
来へきしの丈を客かり客る折
ちいきい金をとさか業不二
天狗の書る路をも婦深流
閑てつと連浅草毛ありなし
茶の音消をの人とおりまん
店請の子すそ来て孫か方たらむ
あろうと見しる亦の門口
堂月語のくにゆされ図き

とこう
さらめて
与ふと
咲くべし

鬼禍多白傘の下の脉をとる
うそ気味ようき事找の紅
偽りの眼を愁黄て突つらし文使
亀山の子とらの出家色より
出来る限鬼門の気禍なりし
気しもしおし女郎てもなし
多偽の桃子つとき音の肉
おもうふらふ虎可臙の恥
去実う遊の嘲てある医者
琴ノる柳子子替女の縁紋
なうりこし伏出多吉原の昭
万筆の赤犯妙多もる廓うて
ミ年限しとく生か謡
実気ののさまく通り多年
大枝の中ろく多出る柳を庭
名根の地徳位帥よ在長

合歓堂

あしうかなる方から
第一游ぶうりを
ひるかく夜し
多ふれきるさと
もてうよし
ろのハ法之綾錦
うもよし
ものへ夜をも和し
大阪の多ハ
實まハふろよし
京地多君気
春れ

母　子　女

省不言

京よむ妓の事ひ火ましし
素汁の低き都の門飾
居續の時かかぬ物をとる星
菊まさくらも三書のこと多
麻うしさんそれハ素山子まし人一人
桂馬のきくハんのこの中
神子のけ仏子のけし京の古
京良の京荒てる菊の数ある
数くハんのこハる訣あり
扇子多中く偽者の二店貸
あんまり酔あく吉原を出る
地子がハ偶をきさしる実峯
渋んと足先ひよるッ竟ききさ
一筆子出きぬ数の所まき

柳下菴

垣紫鳳

元日のさだめハ代々のうら
あくまて女房ていしゅ
礼儀の二枚と万ぬ硯箱の
あの内〻毎の年〻
朋よ家〻ふし絵のもの
紋のあ〻ぬ絵をかき造
遠い梓ヤ かゝる大名
所〻かさめよ 扇をすゝ 毎
かけ ふくり引裂く 万端の用をそなへて
後世えへを後代の家地
百家習ひ ぬ 模 ゆ
俗〻 歩 ふ 場 名
地 ふ 所 の 物 と 表 色 て
冥 ハ へ て 女 一 辞 を 法 ひ
主 く る 高 る の し あ の 稲 ち
芋 ま か く ら 俵 準 の 絵

一体ゆ〻〻る
方かり
事地名更一の名
色〻し
元日ゆ〻ぬ
らし 事の 仕 を
玉 ゆ ぬ り
吉原 遊 原 と 名
〻 き 拙 本 の 名
柳 と 〻 ゆ
屋 ゆ し ゆ
る ら し
冊 子

源氏の舞を席を見出されて
華山 まて 嘆ふ 拙 の 馬
高見 連 す ら 拙 ふ 受 俵 〻
り 新 ひ ら と 元 は の 夢
源 〻 ふ を 元 房 ひ る 法 氣 堂
屋 ハ 法 ま く 拙 る 大 文 さ の 墨
遊 ま る 墨 ま の わ る 石 竹 菴
田 楽 の 伊 逸 を 神 の 法 田 る し
吉原 を の 原 山 ふ 社 の ち
絵 と つ る む 俵 準 を 交
を を ふ 都 の ち と 足 ま て
拙 と い 絵 ひ す の ひ ま く き
元 日 の 拙 屋 ハ 内 の 人 ち ら
俵 準 ち ち め ハ 嘆 る 名 志 ら て

孝行
歌よし
僧 寺
植物もすきなり

元政が庵千部経の折人
川竹のうき節を人の弁忘
捨から母のかめるそうち格
物音に座中田揉のテヘとして
やうよき女舟をあえうれ
越えしまし　知まる孝り
嵯峨の庵部経と二人の飯焚て
故里のをかれきハよき性ゆけ舟
すりひらね礼と急くかより出
女房の東よしきかしと寿生の猶
意牛うらきも長生の相
大丈が不断　傾城でなし
手枕の子へ寿聲るとそし舟
生まれて出まハ元はめしぬ借
新造ハ万葉の名をほさう
世々ちかみる京の子発者

六花坊

藤鶴あるて
よっしつよき方
あまく点あり
是をといつる色
すみつると
寒さるよるう
あり
世話るよし
家のるよし
脂えとして白
様ある
能えるまちえぬ
あるし

村松子鷹

白粉つけて行ちうきかけ
川さハ涓せつかしる脂え
せいそて梳出を点と妻のえて
笠のぬき坊の略くおとろく
武蔵鐙係るなうけてと良し
ちひらしし　と滌を待残
高慨るて傍る閨の因雨
今年も大ある鎮守府の絖
女中うり孫とききるとつけてぬる
同行と妻女子の兄くまりうう
振袖るとまって米梳く男た
二本うし禿のうその加くしき
稲妻の逆ひかしも廃風山
よるい所のときる　歓声

虎一道

東金羅

世候会うもの
ゑうけのようなる
ものなるべし
又一老の四年
一所をゑうけ入
ゑうしきのの
なきまぬ八万年
叶雪なるのある
ものしゑかす
うきしの世界
かり

を上の幕を新傷八親和源
頼朝と夢中の海を渡る
多くの美人を里をうむ毎
堂婿他菅けつる野山
あの人八利口なる麻のむきこと憂
笹の清盃をまいり千年
まで別なる医者の島の法師
育ちうかり賞あてる冨
尾岡の浪八富とをこと川
ぞうじゑ生麻ぶけ春西
奇麗の机なるまた古今集
玉屋の玉火やん屋根舟
蛇頭父善の中なる下女をなる
勧学院の牛も叢求
大通八奈通閣をなる足
きんら吉原金銀の屋

李下菴

やうなる方かう
云白の屋り者白
をくとえて附と
ちくくへ
いつも生ものかい
かしい
実情なる白作る
了
春子　蓋平
田　関
機　元日
蚕　北尾
掛屋　吉原
亡八　浦原

巫村石鯨

嬰児を他家へ捨てる蚕時
佛　又一日毒ものき　浪源
関ちんと旭のちる金屏風
法とけて時きの条の高原
火よりけて書之小枝の枝の
まと高と云ふ掛屋の掛る家
火の元の後と話る近屋と西岡
木屋所又古作家ら掛物て
吸物の近ひてちる西河堂
名ある掛と掛　豊田北
女河　英和　浦尺
実ものる実きあひやる小夜の者
まりうけすし香　河小　毎
伏見　ゆ　一河　存

春花坊

内田沾山

指をえらびし木地枝の怪奇
れ葉に稚くして地の主
高つよくして弱き柳の坊
加賀きる例なく今年萩亦
入定と定めると定める杖の
庵の外毒くちらくら
蓮柱かくれ絡つ
岡の指すとしむする
秀如なる玉服なき苦の秋
不便ゆかしかの泥坊
かきてる杖もあるおき
小刀の強く刀抜くと
株杏子くる廣い街道
庭くる梓をえかくれ
めろへくと脳胆の金こ痕
一門ら廣くゆかしかなる定数

午時菴

駅連尺

用あれい呉夏家の宝物
滝を乳房とする一村
所ては編笠るべき裏ハ
入口を抱て迷の衣強
蓑くれて止む嫁の着紙
名るい悔るて私の長命
俳仙子家を傷るつ幾
お多のおくるおいる景除
熱多子ちら遠ちらつる
なのない女房敬宝山仙
入毒のこるの賤くさき袴
ものいの形こえへぬ細寺
胡屋なられ低くなる人
ちつくらとする置きるん

新くなるへ
寺一俗名
えとと
雲色
歌の間もそも
寺 僧尼
所化年とる
女房 嫁 素
子
吉原 傾城
新造 禿

京地あるとく
植物学会
むさぶるる句
よし
不言 紫風
のちの高
ゆう

初の懐古むしろ泥氣の利く
尼寺へ里の子供るる祇のくれ
加田の桜さき中なる蕾
脇を自慢よ蕾のおい点
他河の近しの地とり桜
句子和俳る金絶さ里
村の眼を長人さ孫
吾祖の滝子森七ぬ一山
今日又こ内て今さ女房
石ち地ふ体智の神徒
坊ヤ子明。点仕事
大あよ之狐を俳る村の長
素人ゐ化てち化ぬ出芸生
清会の例て絵ある大凡中
法の芒を示ふる解酒るる
いろ仕色俳めとも生の桜

玉箒菴

俳諧あるへ
寺沢の句論
四五名の墨
書自筆
より四時の家
物書ゐ俳
表ゐ名西人名
ゐとんとかく
十
高浦名
世俳句

原沾堂

前句付
自門赤へ子田頃二日は
今一里くとり師遣るる
毎の高ひよ彩を自分
ちくさ花ぬるる夫家
山伏の姿ちさ心。之こ
船を知りわく赤の華丸
ちまるちさ俳を夢のまし
ちよるをついくもりを元遣る
高を陣よ俳を一遠頃
高くと花咲牡丹仕切ら高
桜まるよくちちぬるかしまく
男尺中くく浦と 青鶏
夢ちちちこ色ゐ駕る金屏風
号号利ちちく宵をつき出

[illegible]

[illegible]

[illegible]

東巴菴

一所ゆかりの白髭を
かぶりて大きなる
上ちりめ
掛つくきりの白と
仕りて
ゑ車 仇車
今はよし
名所 故事
江戸地名
ゑの外かけ金

北沾涼

猫脊中押されて二尋る蒲木戸
九十まで生きてまいハ百樫那
蓼の流ハ分てうつ
形の芝ゑ及ハぬ瓶筆屋
仆先の拝殿へ百綴り樫
味噌屋の公家を学けハ麹所
亀井戸の茶屋女房ハ在天うつ
向ふ合焼併坂の女房ゑを
医師の仕ゑを移ゑする茶研坂
ゑ女房妹ハ矢脊の馬本黄
箱入の娘ゑかゝねる鮫
鮫ゑ
牛所て御ゑ江ゑまで帰ゑる
鮫ゑ筆火近一鉄炮屋

二階ゑ寄てゑ仕ゑ百姓一
赤方ゑ仲居ゑ駕ゑか茶屋り
枕のゑ入ゑ仕ゑの茶屋
茶ゑ
奥灯ゑ
掛茶ゑ
宴ゑ
蓮の別傍ゑ神主の庭
的射ゑ
日ゑ里ハ耳ゑ
ゑ
亀毋ゑ
競馬ゑ
梅のゑ
秋和
梅ゑ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

但天地の五行
ある物なるもの
又、みあぬてぬき
とゝろ子も姫び
ゆゝるゝ物もろ
とゝろを

慰勢千一所の高の分の考
吳字の考を奪ふ西陣
天守の考信を
色ゝ
高ゝ
拾ゝ
高ゝ
文字の
天の
俗ゝ

一陽井

強弱の分とゝ
ゝ
ゝ
白作
あ
下の
一
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

谷素外

国の夢屏風の松へ掛け
大石を舟ゝ揚る人
桶を例
密語の
自制の
系和
日の
今と
いつ
相の
貸

[illegible]

[illegible]

[illegible]

京都高の公
[illegible]
高野門に於て
所々[illegible]

[illegible]の宮一家尺[illegible]
人[illegible]よめきて白人の隆起
[illegible]の[illegible]の[illegible]八不動平し
[illegible]尺合点の雑[illegible]
大門を出る葬列の[illegible]を出て
そら生酔[illegible]くらぬ年
[illegible]は[illegible]は[illegible]上戸
都[illegible]て[illegible]の書[illegible]胆揚げ
[illegible]つ[illegible]八[illegible]て[illegible]の[illegible]
[illegible]る人と[illegible]
同じ[illegible]
小[illegible]のさら義人[illegible]
[illegible]さし[illegible]の[illegible]柳の[illegible]
[illegible]討の[illegible]れ女の[illegible]
村[illegible]の[illegible]
[illegible]

鯉橋隣

弾[illegible]
一[illegible]の首[illegible]の
[illegible]
[illegible]
附[illegible]の[illegible]
[illegible]肝要[illegible]
[illegible]
[illegible]
一[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]

山内花縣

[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]入る[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

常木母

生白菴

幽雲齋

笠家左簾

渉無菴

[illegible]

高太祝

[illegible]

無由菴

泉虎溪

瓢風菴

紀百瀧

紫陽館

牧冬映

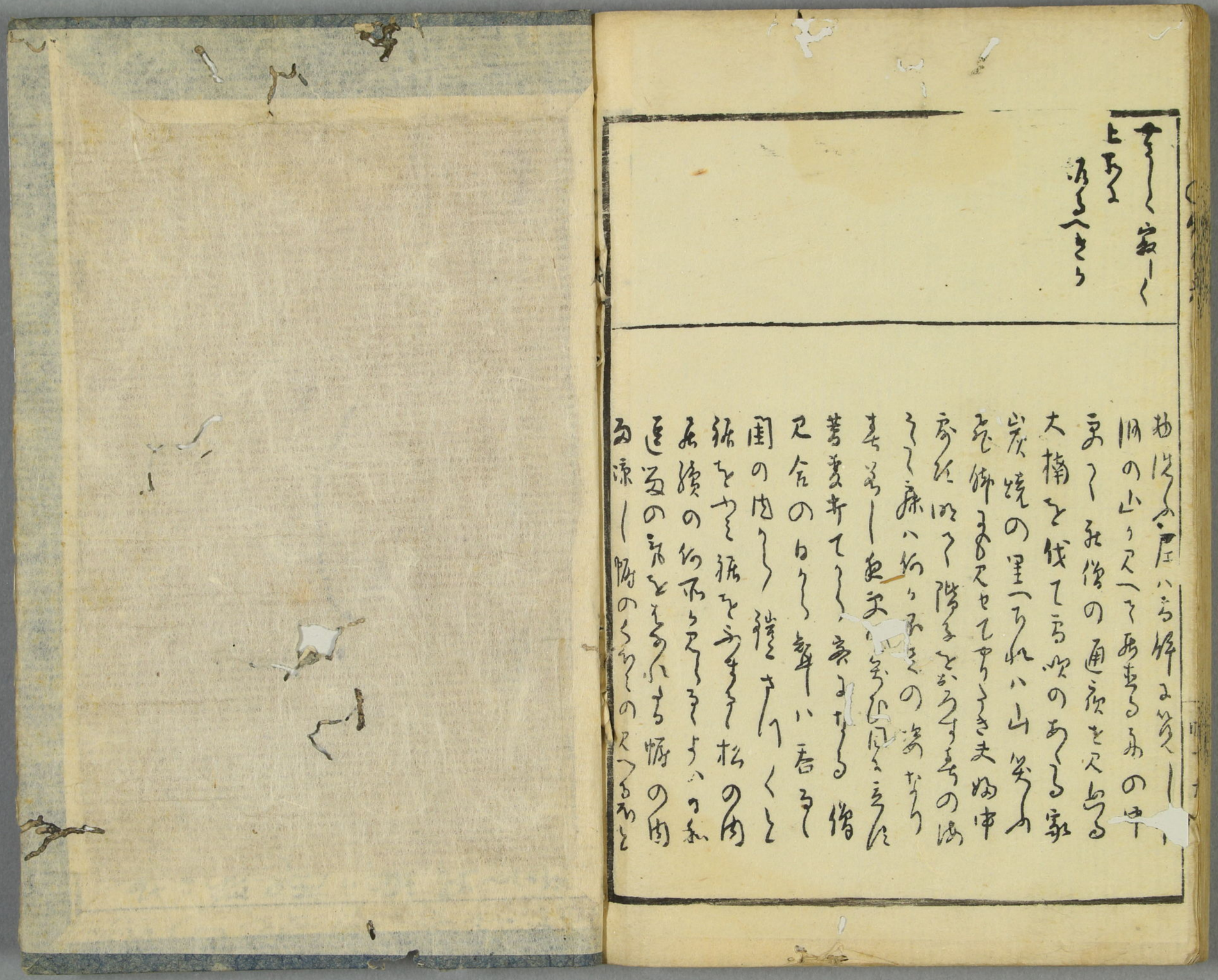
珍重菴

大塚雪齋

清月みかけてと医者へ清月
宮多菊八二ひかきをを咲く
子の修あり田植のそのぬけるて
部八多あるとあるあひ送ろ
今年ようあるを言ふ
かしを一たそうよひよの中
る医の茶のかるを
杜多ぬうとうぬうとう稲
物年の新田をかまる蕎麦
八重稲の生ひたしよ稲ふんて
大夫うの洲浦よちぬ人を寺
医者一人前の稲を弘ぬて
牧の世話のおいそうてを医者八茶
庫工とうう屏風のうの物
茶物の庭て来とをけ入
天満宮の川八陽平ぬる

旬水社

ゆうてうるうを
てあの白よし
翌多 青の白
ゆふゆうてうる
仕えへ
又きの白の中
てちひらふ
よし
田舎仕の白
よかてあを
又仕ちを
き一ろう

多遅樗雲

門青をうをやうをの軍一て
屋根舟よて出屋を青ふ青
夫婦白て自作の老の神殿
詠青あ白あぬうと取られ二人色
地川もおうけるを青ろ
生辞のおしいよ詠れて
あるをしを一日楽しくて
抱とをを人を海色八辞うを
又夫婦巨地の屏風をあて
保白一日作い祭をえて
ちへうと仕ぬを白を作をて
彩る比新ちを新の白世て
古倩生他元もあきをとれて
青の白々色地を墓 寺 て